

研究会・部会・ 委員会・分科会	活動ビジョン・ゴール	年度目標	進捗・課題	予定・行動計画	関連団体等
食品安全研究会					
食品微生物研究部会	食品産業会が抱える食品微生物関連の共通課題を、部会員が協同で(企業の枠を超えて)研究し解決を目指す。食品関連企業の微生物担当者が業務上の悩みや課題を相談・共有し相互解決できる場として機能する。当部会の研究成果を含む食品微生物に関する安全性等の情報について、広く周知活動を行う。	部会員が集まり定期的に交流や情報交換を行える場としての部会運営の再整備(アフターコロナ対応としての集まる場の整備)新規研究PJの立案および他機関との積極的な連携の実施	<p>【全体】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10月6日に研究部会会合および勉強会を開催(対面およびWebハイブリッド開催、参加者43名)。勉強会では下記のお二人の先生にご講義いただいた。 ・ISO/IEC 17025について(製品評価技術基盤機構(NITE)認定センター 土屋年史先生) ・微生物試験の品質管理について(日本食品分析センター 諸藤圭先生) ・食品微生物研究部会主催シンポジウムの開催に向けた準備作業を実施中。 <p>【分科会活動】</p> <p>(1) 芽胞菌研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10月23日に飲料の危害微生物に関する分科会メンバー間の情報交換会を開催(Web)。 <p>(2) MALDI-TOF MS 研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進捗無し 	各分科会の研究活動に加え、各社が共通に抱える食品微生物関連の課題について、部会全体でのディスカッションおよび関連団体等との連携を通じ、課題抽出と解決策の検討を行う。	<p>(公社) 日本缶詰びん詰レトルト食品協会</p> <p>(独) 製品評価技術基盤機構</p>

			<p>(3) チルド勉強会</p> <p>a. ボツリヌス菌接種試験活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動なし（追加試験について日本缶詰びん詰レトルト食品協会にて調整中）。 <p>b. 耐熱性試験法検証活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動なし（検証試験の対外発表に向け、結果を取り纏め中）。 <p>(4) 国際整合性のある食品微生物リスク管理研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・以下の読み合わせおよび和訳を継続実施中。 <p>FAO/WHO Microbiological Risk Assessment Series 24 "Statistical Aspects of Microbiological Criteria Related to Foods"</p>		
食品リスク研究部会	食品の安全性評価の考え方を学び、その普及に努める。	<p>① 食品リスク研究に関する勉強会を3回以上開催し、情報発信する。</p> <p>② 「ナチュラルミステイク」の情報発信。</p>	<p>① 第2回勉強会は9月29日に琉球大学の水谷先生を講師に「微生物や微生物を用いた食品の安全性」についてWeb開催。参加者50名。</p> <p>② アンケート結果を参考に更なる情報発信の方法の検討継続。</p>	<p>① 第3回勉強会を11月13日に東北大学名誉教授の山添先生を講師に「安全性評価における薬物相互作用の考え方」でハイブリッド開催予定。</p> <p>② アンケート結果を参考に更なる情報発信の方法の検討継続。</p>	
香料研究部会	食品香料の性質と安全性等に関し偏向の	—	特になし。	—	—

	無い科学的な調査研究を行う。食品香料に関する正しい科学的共通理解を産・官・学に普及させる。				
食品領域の動物実験代替推進プロジェクト (AAT プロジェクト)					
全体進捗	<p><活動目的></p> <p>1) 動物に依存しない、毒性発現機序に基づいた、ヒトへの予測性のより高い評価アプローチを確立し、食品の安全性および機能性評価の精緻化・効率化を進展させること。</p> <p>2) 動物愛護の世界的潮流の中で食品領域の取り組みを加速させること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 研究 WG テーマ推進による評価技術基盤並びに評価戦略構築とケースレポートの作成。 情報収集・発信 (国際ワークショップ内容のレポートによる発信、シンポジウムの開催)。 	<ul style="list-style-type: none"> 9月11日 プロジェクト全体会議を開催 (八重洲外部会議室 & Web 開催)。 プロジェクト全体及び各 WG の進捗と今後の活動方針・計画を共有し、全体にて承認。プロジェクトを代表しての外部発表について、今年度の実績並びに予定に関して情報共有。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本動物実験代替法学会 (11月) のシンポジウムにて発表予定。 	<ul style="list-style-type: none"> 国立医薬品食品衛生研究所、独立行政法人 製品評価技術基盤機構 (NITE)、アカデミア等の専門家 関連学会 (日本動物実験代替法学会等) ヨーロッパ、アジア等の ILSI 支部
体内暴露予測ワーキンググループ (WG)	食品成分の体内曝露を、動物を用いずに予測する手法の開発推進と現場実装	<ul style="list-style-type: none"> ① 昭和薬科大学山崎研に構築した in silico 動態予測モデルの実装 ② 新規腸管吸収予測ツールの適用性把握 	① モデル構築に使用されていない新規食品成分の動態データ (ヒト) を用いて、モデルの予測精度検証を実施。予測精度が高い、あるいは、低いと想定される化合物群 (適用限界) の特徴を物性値などの in silico パラメータおよび化学構造から予測できないか解析	In silico 予測モデルの現場実装を目指し、適用限界の明確化を優先して行う。そのうえで、予測モデルの活用ガイダンス等の整備を年内に行う予定。	

		③ ケースレポート対象化合物の体内曝露予測	中。 ②、③ 進捗無し。		
データベース WG	食品成分の既存毒性情報(文献等)を収集、活用し、反復投与毒性を予測する手法、システムを開発中。独自に毒性情報を収集することも検討する。	有害性評価支援システム統合プラットフォーム (HESS) を用いた食品成分毒性試験データベース及び使用ガイダンスを含む毒性予測手法の AAT 参画メンバーへの公開	昨年までに構築した食品成分の毒性試験データベース (176 種) の有用性検証を目的に Read-across の予測結果と原著論文を用いて POD やターゲット臓器の予測の妥当性検証を 6 月までに実施。本検証から得られた知見を HESS の利用ガイドとして活用できるよう、事例集を作成中。合わせてプロジェクト内、及び一般への展開に向けた各種課題対応 (有料論文の著作権課題、HESS へのアップロード/更新の方法等の確認) を実施。	各種課題について関係各所との確認を進め、年内完了予定。	
ケースレポート WG	NAMs (New Approach Methodologies) を用いた食品成分の安全性評価戦略を具体化させ、体内曝露予測 WG とデータベース WG の活動と協力し、in vitro assay 系を加えたリスク評価戦略を作成し、ケースレポートとして発信する。	第 1 弾のケーススタディは「肝障害」をテーマとし、ラット肝細胞を用いた試験から in vitro PoD を求め、評価スキームの妥当性を検証する。	In vitro assay 系では、ラット肝細胞を用いた文献報告を活用し、ベンチマークドーズ (BMD) 法にて in vitro PoD を算出。In vivo assay 系では、文献報告のあるラット単回および短期反復投与試験の肝障害 LO(A)EL から曝露濃度予測値 (in vivo PoD) を算出。 BMD 解析における課題を抽出すると共に、in vitro および in vivo PoD を比較することで、設定した評価戦略の妥当性の検証を実施中。	ラット評価系に続き、同様な手順にてヒト評価系での検証を実施し、課題を確認・抽出しながら評価戦略の妥当性について検証を進める。 BMD 解析における課題については、有識者への相談を計画している。	

<p>企画運営 WG (国際ワークショップ & シンポジウム WG より変更)</p>	<p>動物実験代替法における各国の技術・規制動向に関する情報を発信することにより、食品業界における代替法の開発や取り組みの推進を促す。</p>	<p>評価技術に関する情報を収集しプロジェクト内へ共有すると共に、プロジェクトの活動内容を学会やワークショップ等を通じて発信する。</p>	<p>食品の機能性評価における動物実験代替法の活用について、専門家の先生による講演会を企画している。プロジェクトメンバーの意見の取りまとめと WG メンバーによる調査により、7名の先生が演者候補として挙げられた。最初に講演いただく先生の決定に向けて、研究内容や研究領域を調査中。参画企業の興味や社会実装の可能性等を考慮して決定する。</p>		
<p>研究会・部会・委員会・分科会</p>	<p>活動ビジョン・ゴール</p>	<p>年度目標</p>	<p>進捗・課題</p>	<p>予定・行動計画</p>	<p>関連団体等</p>
<p>バイオテクノロジー研究会</p>	<p>バイオテクノロジーを用いた持続可能な食料の安定供給への貢献を念頭に、バイオテクノロジーの重要性の理解を深め、バイオテクノロジー応用食品・作物・添加物等の安全性・活用に関する調査研究と情報提供を産・学・官連携及び国際的ネットワークを通して推進し、科学的根拠に基づく国際的に調和した安全性評価法や活用法の</p>	<p>1. ERA プロジェクト調査報告 (年4回) 2. バイオテクノロジー応用微生物を利用して発酵生産された食品・食品添加物等の安全性に関するワークショップ 3. 第16回 ISBR (International Society for Biosafety Research) 2023 への安全性評価の</p>	<p>・9月20日第3回バイオテクノロジー研究会開催(オンライン・会議室ハイブリッド形式)。 ・ERA プロジェクト調査報告 No. 65 号のレビュー、監修。 ・ERA プロジェクト調査報告 No. 66 号の論文抄録の収集及び事前監修依頼。 ・ISBR2023 の報告書 ERA 報告書特別号及び「イルシー」誌フラッシュレポートの印刷手配。 ・ERA 報告事業来年度からの新レビューアー先生の契約。 ・「バイオテクノロジー応用微生物を利用して生産された食品・食品添</p>	<p>ERA プロジェクト調査報告 No. 65 号の発行、配布。 ERA プロジェクト調査報告 No. 66 号の論文抄録の収集及び事前監修依頼。 「バイオテクノロジー応用微生物を利用して生産された食品・食品添加物の安全性に関する WS」準備。</p>	<p>農林水産省 厚生労働省 内閣府食品安全委員会 環境省 文部科学省 経済産業省 筑波大学環境系 & つくば機能植物イノベーション研究センター (T-PIRC) 明治大学農学部 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 (農研機構) 作物研究部門 横浜国立大学大学院環境情報研究院</p>

	発展に貢献する。	専門家の派遣 4. 遺伝子組換えナタネの ERA に関する研究成果の論文発表	加物の安全性に関する WS」(2023年12月4日開催予定)準備。		千葉大学大学院園芸学部
栄養健康研究会					
栄養研究部会	「健康寿命延伸」はグローバルな持続可能な開発目標 SDGs の目標3「すべての人に健康と福祉を」に合致することから、「健康寿命延伸」をキーワードとした活動を継続する。	「健康長寿延伸」のための最新のエビデンスを継続して発信していく。 ●公開セミナー(有料)をZoomミーティングで1年に数回開催する。 ●セミナー参加登録者に対しては、オンデマンド配信を実施する。	2023年からは、活動テーマを「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは」とし、「世代別の健康と栄養」に関する公開セミナーをシリーズ化して開催する。 進捗は、以下の通り。 ① 第2回公開セミナー(10月23日 Zoom 開催)に向けて ●ILSI Japan ホームページに参加登録サイトを公開したので(8/23)、各種学会・団体・協会等に対して、第2回公開セミナーのプロモーションを実施した。 ② 第3回公開セミナーに向けてお二人の講師の先生に「要旨執筆およびご略歴記載依頼書」を再送信した(リマインド)。	実績は、以下の通り。 ●第2回公開セミナー「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは：小児期編」を10月23日に開催(Zoom)。 ●参加登録数：90名(一般企業、大学、学校、医療機関等の非会員および ILSI Japan 会員企業) ●参加登録者へのオンデマンド配信開始：10月30日(月)～1か月間 計画は、以下の通り。 第3回公開セミナー「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは：中高年期編」を2024年2月16日(金)の午後に開催予定。	
GR プロジェクト	食品・食事の血糖応答性の簡易評価法(GR法)の確立と普及	GR法の確立・発表論文発表	論文投稿準備(共著者レビュー) GR法詳細条件の検討	論文投稿 GR法に関する討論会の開催	

茶類研究部会・ 茶情報分科会	茶樹に係わりその成分の世界的な多様さ、飲料その他商品に係わり各種茶成分の機能性、研究・開発・商品化等につき会員相互間の情報交換を深めると共に、外部からも情報を得る。	—	特になし	—	—
-------------------	--	---	------	---	---

CHP (Center for Health Promotion)

Project PAN (Physical Activity and Nutrition) “身体活動と栄養”プロジェクト	超高齢化が進む国内において、働きざかりの人々や高齢者の健康維持を支援する、運動と栄養の複合プログラムの開発と実践	<ul style="list-style-type: none"> ➤ ヘルシーエイジングのためのプログラムの開発・普及 ➤ 介護予防教室の開催（自治体、社会福祉協議会、企業） ➤ 地域リーダーの育成（大学、社会福祉協議会、シルバー人材センター） ➤ 論文等、科学的成果の発信 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 2023年度「すみだテイクテン教室」秋教室開催（9/6, 9/20, 10/4, 10/18, <u>ユートリヤすみだ生涯学習センター</u>マスターホール, 10/5, 10/19, 10/26, <u>緑コミュニティセンター</u>多目的ホール） ➤ テイクテン介護要望活動リーダー養成講座 主催）津和野町シルバー人材センター（9/12, 9/13, <u>津和野町共栄館</u>） ➤ 東京家政学院大学 栄養プロデュース実習（9/5, 9/6, 9/19, 9/20, 1班, 10/3, <u>10/5</u>, <u>10/17</u>, 10/19, 2班） 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 日本公衆衛生学会発表 ➤ 論文投稿 ➤ ホームページリニューアル ➤ 東京家政学院大学栄養プロデュース実習受け入れ 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 石巻専修大学 ✓ 鹿児島大学 ✓ 島根大学 ✓ 札幌医科大学 ✓ 東京都健康長寿医療センター研究所 ✓ 国立健康長寿医療センター ✓ 墨田区 ✓ 横浜市社会福祉協議会 ✓ 岩国市社会福祉協議会 ✓ 吉賀町社会福祉協議会 ✓ 津和野町シルバー人材センター ✓ 益田市シルバー人材
---	--	---	---	--	---

					センター
Project DIET (Dietary Improvement and Education with TAKE 10! [®]) “途上国栄養改善と栄養教育”プロジェクト	途上国、新興国における官民連携の栄養改善の取組み「栄養改善事業推進プラットフォーム」(NJPPP)のプロジェクトとして、工場など職場の栄養改善プロジェクトを東南アジア各国で推進。	<ul style="list-style-type: none"> ➤ フィリピン: 「フィリピンの栄養強化米プロジェクト2022 (調査研究)」2024年パリ栄養サミットに向けプロジェクトの総括を実施。 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ フィリピン FNRI への今年度提案内容を「栄養強化米のソーシャルマーケティング調査」に決定し打診したところ、ソーシャルマーケティングより先ず栄養強化米の有用性研究を実施したいと返答があり、構想が合わないため、今年度の提案は見送る方針 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 今年度提案は断念 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ Food and Nutrition Research Institute (FNRI: フィリピン食品栄養研究所)
		<ul style="list-style-type: none"> ➤ ベトナム: 「ベトナムにおける野菜の摂取行動に影響を与える要因調査」ビジネスモデル構築、並びに2024年パリ栄養サミットに向けプロジェクトの総括を実施。 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 進捗なし 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 今年度提案について、実施会社の意向の再確認を行う予定 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ National Institute of Nutrition (ベトナム栄養研究所)
		<ul style="list-style-type: none"> ➤ ミャンマー: 「完全オンラインによるブロックチェーン技術を応用した職場における栄養教 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 進捗なし 	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 状況注視を継続 	

		<p>育」 栄養教育推進 に焦点を当て たビジネスモ デル構築に向 けた展開を計 画。</p>			
		<p>➤ インドネシ ア:「インドネ シアにおける 健康的な食事 の普及に関す る調査 2022」 ビジネスモデ ル構築、並び に2024年パリ 栄養サミット に向けプロジ ェクトの総括 を実施。</p>	<p>➤ Web 会議を実施し、本年度の役 割は対象者への質問内容の確 認、及び回答の解析であることを 確認</p>	<p>➤ 質問作業のフォロー並びに 回答の解析</p>	<p>✓ ボゴール農科大学 (現 IPB Univ.) ✓ SUN Business Network Indonesia</p>
CHP 全体	日本の産・官・学界に蓄積された栄養学、医学、公衆衛生、衛生環境等の分野における科学的知識および技術を、国内および世界的に共通な課題の解決に活用し、SDGs に基づいた社会貢献を行う。	<p>➤ SUN Business Network Japan (仮称: SBNJ) 事務局機能誘致に向けた活動継続。</p> <p>➤ SDGs 貢献プラットフォームの形成。</p>	<p>➤ SBN 本部とのセミナー開催に向けた打合せを行い、開催日は、来年1月31日に決定</p>	<p>➤ セミナー開催後の ILSI Japan の役割具体化を目指す</p>	<p>✓ Global Alliance for Improved Nutrition (GAIN)</p>

研究会・部会・委員会・分科会	活動ビジョン・ゴール	年度目標	進捗・課題	予定・行動計画	関連団体等
国際協力委員会	アジアの ILSI 各支部間の交流による食品法規動向及びリスク評価等の情報収集・共有化と ILSI Japan 関係者への成果報告	10月26-27日開催予定の Asia Sciences Institutes Network (ALSIN) 会議(アジア地域 ILSI 支部との情報交換会)への参加、情報交換	<p><進捗></p> <p>① 前回の委員会での確認事項を踏まえ、担当者は個別にスライドを作成。</p> <p>② 委員会開催(10/5 ハイブリッド):</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主催者側からの正式要請に伴い、発表課題と担当者、時間割を確定(事務局を通じ、主催者に連絡) ・原稿進捗の確認(音声データ入り ppt の作成方法も併せ確認) <p>③ 10/25: ILSI 台湾 10 周年記念シンポジウム出席(台北市:対面のみ) 事務局山口様ほか委員会メンバー 2 名参加</p> <p>④ 10/26-27: ALSIN 会議開催(台北市) 対面参加者:同上 Web 参加:委員会メンバー 5 名</p> <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・イルシー誌への投稿(締切:2/15) 	<p>次回委員会は12月開催予定(調整中)。議題は下記を予定。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・振り返り ・イルシー誌投稿 ・今後の活動計画 	アジアの ILSI 各支部
食品機能性研究会・AI 栄養・機能性研究部会					
AI 栄養機能プロジェクト分科会	実生活から創出される莫大な量のリアルワールドデータについて、最新のデータサイエンスおよび AI 技	<ul style="list-style-type: none"> ・フレイル予測モデル論文化 ・フレイルナレッジグラフ作成 ・ナレッジグラフ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 月次運営会議(9月)、(10月)を実施し、プロジェクト全体の進捗確認、課題・スケジュールを確認、更新。 ○ 和食 WG:解析対象について検討 	○ 北大阪健康医療都市(健都)、11月26日の健都フェスにてポスター発表。	国立健康・栄養研究所(健栄研)

	術を活用し、様々な生活習慣と健康との関係性を解明することで、一人ひとりに適した情報提供を可能とする AI システムを構築する。	スキル（育成） ・北大阪健康医療都市（健都）での発信	中。 ○予測モデル WG：論文化に向けて解析継続。 ○フレイルナレッジグラフスキル WG にて自然言語処理習得中。 ○AI と食品勉強会 10 月 オンラインで約 70 名参加 ○健都見学会 10 月		
AI ダイアトロフィ研究部門分科会	数千分子種よりなる食品摂取によるヒトの代謝状態を最新のコンピュータ技術と計算科学を活用し、高速で安価に食の機能性・安全性を予測する AI システムを構築する。	・代謝モデルの領域拡大 ・機能伝達経路のイジングモデル ・AI 教育	月例の報告会が、9 月 19 日（月）および 10 月 30 日（月）に、Zoom によりリモート開催された。代謝／免疫の量子コンピュータによるネットワークのモデル化（イジングモデル）」の進捗報告とその原理の概説、および「AI リテラシー講座」として実験医学（月刊誌）の特集である「AlphaFold の可能性と挑戦」について解説が行われた。	ILSI Japan 会員向けにオープンセミナーを 11 月下旬もしくは 12 月上旬に開催予定。発表内容としては 2 年半実施してきた現時点での進捗として、代謝／免疫系のイジングモデルなどについて発表する予定である。	東北大学未来科学技術共同研究センター (NICHe: New Industry Creation Hatchery Center, NICHe) 東北大学大学院農学研究科
情報委員会・編集部会	・調査・研究活動とその成果の発表 ・科学情報の普及 ・国内外の関連機関との交流・連携	1. 活動報告配信（年 6 回） 2. 機関誌「イルシー」の発行（年 4 回） 3. 「栄養学レビュー」誌の発刊（年 4 回）（女子栄養大学出版部との共同事業）	1. 活動報告 ・2023 年 7, 8 月分配信（9 月）。 2. 「イルシー」 ・156 号：編集中（2023 年 11 月発行予定） 3. 「栄養学レビュー」誌 ・122 号：編集中（2023 年 11 月発行予定） ・123 号：編集中（2024 年 2 月発行予定）	1. 部会活動報告の配信（1 月、3 月、5 月、7 月、9 月、11 月） 2. 機関誌「イルシー」の発行（2 月、5 月、8 月、11 月） 3. 「栄養学レビュー」誌の発刊（2 月、5 月、8 月、11 月）	

		業) 4. 種々出版物発刊 のコーディネー ト			
--	--	----------------------------------	--	--	--

【事務局からのお知らせ】

理事会	<p>第4回理事会が令和5年10月11日（水）にWebとリアル参加にて開催された。</p> <p><決議事項></p> <p>○本部理事会メンバーの選出 台湾、韓国、インド、日本の4支部から候補者を選出するとの本部の指示により討議の結果、日本支部から候補者が出なかったため、台湾支部の候補者を選出することを決議した。</p> <p><討議事項></p> <p>○理事長の選出、ILSI Japan の在り方 次期理事長の選出について、討議した結果、インダストリー側から、まず ILSI Japan の在り方について議論することが先である、との意見が出た。そのため活動内容について会員各社に簡単なアンケート調査を実施し、次回理事会にて結果を報告することになった。</p> <p><報告事項></p> <p>1. ILSI Japan 収支報告 2023年の基本収支見込と2024年基本収支予算について説明した。24年収支については、今年より厳しいため、会費の値上げ案が出された。ILSI Japan の在り方を議論し、それに基づいて収支を見直すべきとの意見が出た。</p> <p>2. CHP 活動 12月の理事会の事前情報提供として ILSI Japan と CHP の経理の統合について、メリットを説明し、意見をもらった。</p> <p>3. AI 栄養・機能性研究部会共同研究講座 来年3月に第2期を始める前に、全参加企業に今後の参加についてのインタビューをし、その結果が芳しくないことを報告した。今後の対応について意見をもらった。</p>
事務局	<p>9月末に事務局次長の山越純氏がキッコーマン（株）からの出向を解かれ帰任し、同社から新たに杉本勝俊氏が10月より出向となった。</p>